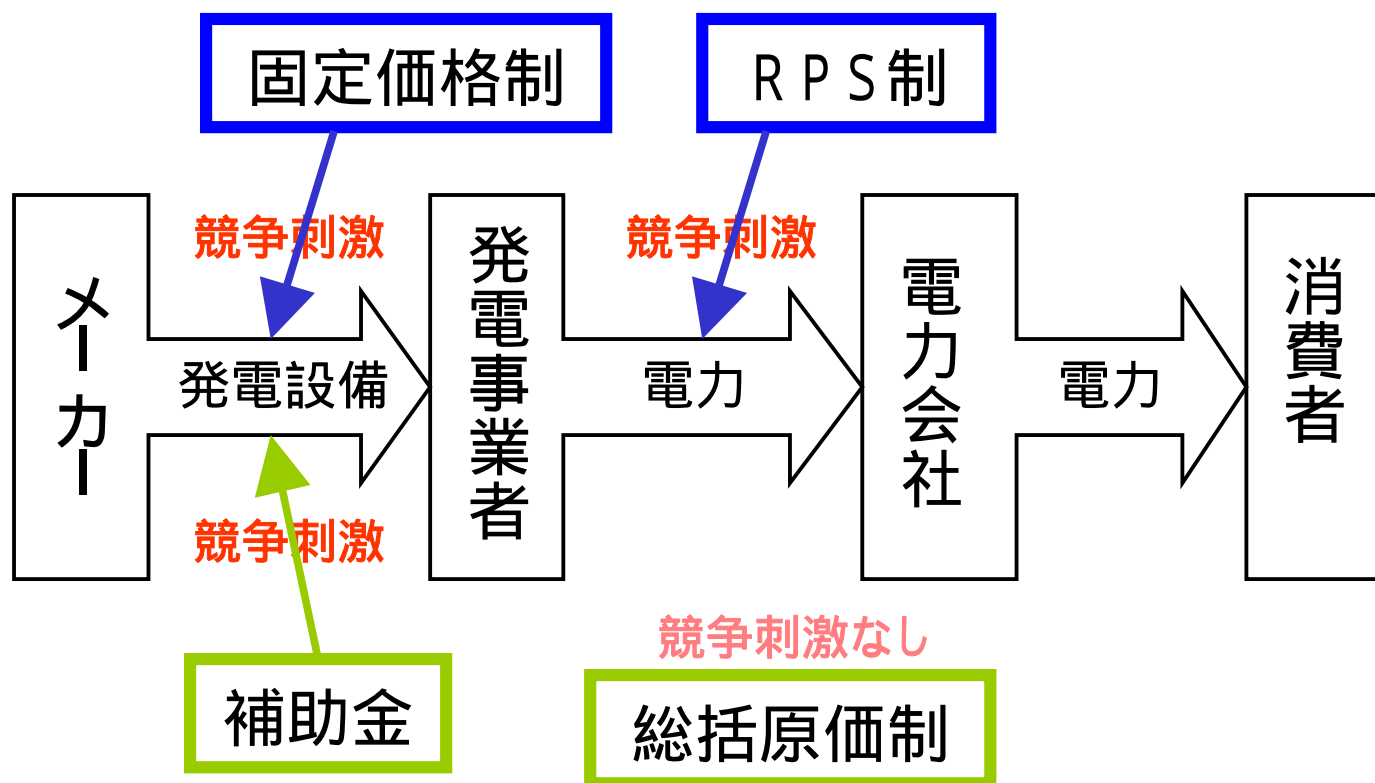


電力インフラ大転換に  
必要な投資を  
誘発する制度は何か？

# 比較した4つの制度

市場メカニズムを積極活用する制度



市場メカニズムを(あまり)活用しない制度

# 固定価格制

- 促進対象発電からの**買い取り価格を長期固定**する制度。買い取り価格は発電事業者に利益の出る水準(ただし低リターン)。**発電方式ごとに異なる価格**が設定される。
- 発電事業への**大規模投資を促す**(低リターンだが低リスクの投資対象)。
- 設備マーケット急拡大でメーカーを刺激
- 設備が安いほど発電事業者の利益が増加するため、メーカーの**価格競争が進み、短期間での価格低下**が期待できる。

# RPS制

- 電気事業者に対して、発電・購入電力の**一定比率以上を促進対象電力にするよう義務づける制度**。
- (政府が定める)義務づけ枠に応じて発電設備の市場が広がる(RPS枠が天井になりがち)。
- 既存技術で低コストの発電方式が有利になり、新技術は不利になる。
- 電力会社の過大負担を回避すると、**促進対象電力の市場が買い手市場となる**。

# 補助金

- 発電事業者に対して、設備導入費用の一部を補助。
- (政府が定める) 予算枠に応じて発電設備の市場が広がる (予算枠が天井になりがち)。
- 発電方式ごとに異なる補助率を設定できる。
- 発電事業者に利益が出る補助率を設定できれば市場拡大が見込めるが、低い補助率では効果が限定的。

# 総括原価制

- 発電設備の導入コストを積み上げて発電原価を算出し、それに見合う価格での電力買い取りを保証する制度(自由化以前の電気料金制度がこれ)。
- 総需要拡大期の投資拡大に適合するが、インフラ転換に適合させるには、RPSなど義務的制度和との組合せが必要(市場枠を規定しない制度)。
- メーカーに対するコスト低下誘因がない。

# 固定価格制の優位点

## 青天井

- ・ RPS制や補助金は市場枠を政府が規定するため普及拡大が控え目になりがちである。
- ・ 固定価格制は導入枠が青天井であり、急速な普及拡大に適している。
- ・ 過剰な拡大を心配する向きがあるが、その場合には制度を見なおせばよい(欧州では今年になってさかんに見直しが議論されている。始める前から行きすぎを心配するのは日本人の悪癖。
- ・ 総括原価制も青天井。

# 固定価格制の優位点

## 水準を合理的に定めやすい

- ・ 固定価格は市場価格(設備市場・資金市場)の動向で決まる。
- ・ RPS枠は審議会等で決めるので恣意が入りやすい(欧州では10%・20%といった桁なのに対して、日本では1.35%など、極端な相違がある。つまり合理的に枠を決めるのが難しい)。
- ・ 補助率は普及目的の合理性以外の要因(他の補助金との整合性など)に影響されやすい。
- ・ 総括原価制も原価部分は市場動向で決まる。



# 固定価格制の優位点

## 新技術の導入に適する

- ・ 固定価格性は、発電方式ごとに価格を定めることと、青天井であるため意欲的な投資計画の誘因となる。
- ・ RPS制は、発電方式どうしの競争になるため、成熟した技術が有利に、新技術が不利になる。
- ・ 補助金は、新技術を有利にすることが可能であるが、予算で枠が規定されるなど、意欲的な投資の誘因にはなりにくい。
- ・ 総括原価制は、新技術を阻害しないが、誘因にもならない。